インドネシア人に対する漢字学習上の問題について

アエプ　スプリアディ

1．はじめに

近年，世界で多くの人たちが日本語を学んでいる。もちろんインドネシアも例外ではない。そして，日本語は難しいといわれている。難しいのは特に動詞・敬語・漢字である。

言語を勉強する中では，聞く・話す・読む・書くということがある。これら全ての四つのことは大切だと思うが，日本語を外国語として，非漢字系学習者（特にインドネシアの学習者）にとって，読むこと・書くことに当って，問題になるのは漢字である。

しかし，漢字がどんなに難しくても，日本語では漢字という表記があるから，漢字に触れれば，読解面の日本語が進歩せず，成立しないと思う。

2．バンドン教育大学で学ぶ漢字

インドネシアでは日本語を教える大学はたくさんある。特に西ジャワのバンドン市には三つある。大学によって重点がおかれるところが違う。パジャジャラン大学は日本語文学・バンドン教育大学は日本語教育・外国語大学は日本語会話を重点をおく。

バンドン教育大学は教育大学だから，言語芸術教育学部・外国語学科・日本語教育プログラムでは，日本語はもちろん，一般的な教育学も教わっている。例えば，教育学基礎や心理教育学や教育学評価やカリキュラム文折などがある。日本語の方は，LL授業・読み書き・文法読解・翻訳・作文・会話・表記である。読み書きではひらがなとカタカナの表記で教えられている。漢字は表記の授業で，一年生の後期から勉強し始める。一週間に一回だけのこの授業でいろいろな漢字のことを教えられている。その中で書き方・読み方を学ぶのである。使われている教科書が二つある。初級は『日本語初歩国際交流基金』とともに，バンドン教育大学日本語プログラムのスタッフが作った特別な本である。内容は『日本語初歩国際交流基金』の毎課にある漢字の音訓読みと，それらの熟語が挙げられている。この中に漢字の数は四百字程度が収められている。中級は国際交流基金派遣専門家の協力のもと，バンドン教育大学日本語教育プログラムのスタッフにより編纂された『中級日本語読解』から漢字教育用に作成されたものである。この中に漢字の数は三百字程度。

という具合に，バンドン教育大学で学ばれている漢字は，この二つの教科書で七百字程度。この程度では，実際の漢字の数から見れば不十分ではないだろうか。

3．インドネシア人に対する漢字学習上の問題

前述のようなバンドン教育の場合を見ると，漢字教育用教科書についてはよいと思うが，問題は時間に当っている。というのは，どんなに時間があっても，一つ一つの漢字のことを説明するため，足りない

のである。

それから、漢字が難しいと思われているのは、自国語の文字と比較するからである。その数に驚き、その字形の複雑、読み方もいくつもあることで学習に絶望感を抱く。よって、漢字学習の中での、一般的な難しい点は

－数が多くて覚えにくい
－字画が複雑
－読み方がいくつもある

であるといえる。次にこの三つのことを一つずつ述べたいと思う。

数が多くて覚えにくい

インドネシア語では使われている文字は二六字のアルファベットである。漢字について、アルファベットと比べたら、漢字の方がはるかに多いので、覚えにくい。

漢字を勉強するの中で、次々に新しい漢字が出てきて、いつになったら終わるのか見当もつかない。さて、漢字はいくつあるか。そのような質問も出てくる。武部著『漢字の教え方』では、答は「無限」であると述べられている。また次のようなことも言っている。日本語の最も大きな漢字の辞書は、諸橋轍次（もろはし、てつじ）「大漢和和典」（全十二巻と索引一巻）であるが、これに約五万の漢字が収められている。しかし、これに載っていない漢字も、いろいろある。実際に日常生活で用いているのは、三千ぐらいである。（P．12）

このことを見れば、これが非漢字系学習者にとって大きな問題であることがわかる。これはアルファベットと漢字とを字数の面で比べているからである。確かに漢字は難しい。さらにバンドン教育大学の状態を見れば、実際に日常生活で用いている漢字の数までも、まだとどかないといえる。

日本では、小学校の学習漢字で九九六字で、中学校では六五十字増えて、一六四六字である。高校では常用漢字一九四五字の読み書きができることが基準となっているが、実際には高校卒業の時点で約四千字の漢字に接しているのが普通だと言われる。ところが、それでも漢字全部の数からいえばまだ十分の一にも充たないのだ。漢字塾『「漢字」早わかりマニュアル』（P．9）ではこのように述べられている。

字画が複雑

初級の教科書に出てくる学習漢字は「山、川、中、木、日」のように画数の少ない漢字もある。しかし、2・3画しかないアルファベットに比べると、確かに漢字は複雑である。漢字は三画か四画だと、偏や旁などの部首を表わすのが精一杯で、五画、六画、七画あたりからだんだん漢字らしくなっている。武部『漢字の教え方』（P．13）では漢字について驚くことの第2点は、字画が複雑だということである。最も簡単な漢字は一、1画である。これに対して、前記の諸橋轍次でみると最も画数の多いのは、六四画である。それは龍という字である。

これは漢字が形から成り立つからである。『小学漢字新辞典』（尾上兼英）では、漢字の成り立ちは「六書」とよばれている。それが「象形・指事・会意・形声・転注・仮借」の六の分類である。

一方、漢字塾『漢字マニュアル』では、漢字は画数が多いから難しいとは限らない。インドネシア漢字学習は漢字は画数が多いから難しいと思っているから、画数が多い漢字に集中して、意外に画数が少ない漢字でも読めなかったりすることもある。

例．生る　＝なる
　　笑む　＝えむ
　　疾しい＝やましい
　　而して＝しかして
　　屯する＝たむろする
　　困に　＝ちなみに
　　和やか＝なごやか

などは字画は簡単な漢字なのに難解である。

漢字の読み方がいくつもある

荒竹著『表記法』（P.47）では、漢字の読み方は音と訓に分けられる。音は中国語の漢字の発音を日本人が聞いて、そのまま取り入れたものである。訓は漢字の意味を日本語に結びつけて、その漢字を読んだものであるといっている。

音読みがいくつある字が多い。一方、訓をいくつも持つ字もある。しかし、音と訓訓とかりない漢字も少なくない。漢字の中には、員、液、恩、禁、校、税、理などのような、音だけで使われるものもあれば、畑、峠、貝、扱のような訓だけのものもある。こうなると、だれが見ても、確かに漢字は多様である。

それにまた同じ訓で、いくつもの漢字が使われている場合もある。

例、あつい　＝暑い・熱い・厚い
　　あらわす＝現す・表す・著す
　　はかる　＝計る・量る・測る

これらは、同訓異字とよばれるものである。同音異字とよばれるものも少なくない。

例．いし　　遺志・医師・意志・意思
　　いどう　　異動・移動・異同
　　かんしん　感心・関心・歓心・寒心
　　きかん　　機関・期間・器官・基幹・貴簡・帰還・既刊・貴官・気管・旗艦

これが、耳で聞いただけでは分かりにくく、字を見なければ正しく理解することは困難なことである。それから、同じ漢字でも、音で読むか訓で読むか困ることになっている。

例．市場（いちば・ところ・しじょう）
　　音　（まっき・まつご）
　　末期（まっき・まつご）
　　大家（おおや・たいか・たいけ）
　　今日（こんにち・きょう）

さらに、二字以上組み合せた漢字は、音だけで読むもの、訓読みだけのもの、音訓をまぜたもの、連濁を生じるものもある。これもけっこう学習者を困らせているものになっている。

例．1．前後左右・春夏秋冬・早期発見（音・音）

2．山芋・雨水・大風・花畑　　（訓・訓）
3．団子・出立・合羽・胴長　　（音・訓：重箱読みという）
4．出発・三本・三千・小人　　（訓・音：湯桶読みという）

そのほか，何回も出ている漢字でも読めなかったりすることもある．それは，特別な漢字の読み方があるからである。二つ以上の漢字を当って，一字ずつ分けて読むことのできないもの，漢字は意味上のはたらきのみに用いられていて，音も訓も関係がない。これは熟字訓という。

例．明日（あす）　今日（きょう）　昨日（きのう）
土産（おみげ）　一日（ついたち）　七夕（たなばた）
足袋（たび）　大和（やまと）　など

当て字という特別な読み方もある．荒竹著『表記法』では，当て字には，外国の地名や外来語を，漢字の音だけを利用したり，または意味だけを利用して表したものがあるといっている。

a．読み方を利用した当て字の例

国名・地名	略した使い方	漢字名
アジア	亜	亜細亜
アメリカ	米	亜米利加
イギリス	英	英吉利
イタリア	伊	伊太利　など

b．漢字の意味を利用した当て字の例
タバコ（煙草）　アルコール（酒精）　カボチャ（南瓜）
ビール（麦酒）　ガラス　（硝子）　キセル　（煙管）

この全て上げたものを見れば，確かに漢字は多様で難しいである。

4．克服

この四章のような「克服」についても，漢字の長所を取り上げたいと思う。漢字を勉強する中で，日本語の教科書だけに漢字の学習を任せておくと，漢字はなかなか身につかない。そこで考えられるのは，教科書とは別に漢字学習のための読本を作ることである。それからどう教えたらいいのだろうか。これに対して，漢字のことをよく知っている者で，経験した先生が必要のである。漢字についてを知らないと教え方に克服することができないと思う。

さて，いくつか漢字の長所を取り上げることにする。まず漢字は意味を表すこと。発音ができなくても，漢字を見れば分かる。これは漢字は図形であるから。図形というのは，直接，意味を対応しているといわれている。「寺」の意味は「うごかない」である。「言」の意味は「ことば」である。漢字の「詩」，それは，「うごかないもの」と「ことば」である。「詩」は，中国の古い「うた」である。「詩」の日本語は「し」である。「し」の発音は長くなるから。ことばはとても遅いである（ことばは動かないである）と武部著『漢字はおもしくなり』ではいっている。

二つ目は部首のこと。漢字を形作っている部分を分類したものを部首と呼んでおり，総数は二百数十ある。これらを，漢字のでの部分に用いるかによって大きく分けると，へん（偏），つくり（旁），かんむり（冠），あし（脚），かまえ（構），たれ（垂），にょう（繞）

の七つになる。部首は漢字の共通部分として意味を表しており，漢字を覚えたりするときに役に立つ。

漢字塾編著『漢字マニュアル』では，どれが「部首」かがわかれば第一段階はラクラク合格だと言われている。部首は意味を表す。

例．イ　ニンベン。人に関連するもの。
　　仁，住，伴，佑，佇など
　車　クルマヘン。車と関連するもの。
　　軌，軒，転，軽，軸など
　月　ニクヅキ。肉体に関するもの。
　　肌，肝，肥，肪，肢など

つくり
　ア　フシヅクリ。割符に関連するもの。
　　即，卵，卸，却など。
　リ　リットウ。刀に関連するもの。
　　刊，別，刺，判，削など。
　斤　オノヅクリ。斧に関連するもの。
　　斬，斫，斯など。

かんむり
　艹　クサカンムリ。草に関するもの。
　　芳，英，芽，茎，若など。
　宀　ウカンムリ。屋根で覆うこと。
　　穴，宇，守，宅，完など。

それらの「部首」というのを知っておかなければならないと思う。

それから，一つの漢字を書き始めて書き終えるまでに，一家の順序がある。これを筆順と加書き順とかいう。筆順の必要性は武部著『漢字の教え方』では，漢字というのは，書き終わった字体として正しければ，それでよいとすべきだいっている。それから，目で見て覚えるより也，手で書いて覚えるほうが効果的である。正しい筆順で書くようにすることで，能率的に形よく書くことができ，また記憶しやすくなる。筆順が慣れてくると習慣化して，ほとんど意識しなくても自然にほかの漢字も書けるようになる。

そのほかは，漢字というのは音と訓のあることは漢字の読み方を複雑にし，不便が起きる原因になっている。しかし，訓読みのおかげで意味はだれにでも分かると荒竹著『表記法』ではいっている。このことが知っているなら，漢字は難しいということはないと思う。

一方，教育授法は，武部は「漢字は難しくない。漢字は面白い。これが私の漢字教育のモットーである。それには，教師自身としても，漢字を面白いと思うようにならなければいけない。教育自身で漢字が難しいと考えているようでは，学習者のほうも難しいと思ってしまう。漢字教育に成功するためには，教師自身の心構えが大切なのである」といっている。

それが，漢字は面白くて難しくないと思うのは学習者に興味を持たさせるためのである。どんなに簡果なことでも興味が持たなければ，難しいことになる。その逆に，どんなに難しいことでも興味があれば簡単なことになる。興味が成功するためには，出発点になれると思う。

5. 結論

日本語はインドネシア語と発音は同じで、アルファベットで教えられたら、あまり難しくないといえる。しかし漢字に当って、文字はぜんぜん違うので難しいといわれている。ということで、漢字は難しいというのは、これが日常生活の中では使われていないからである。

しかし、漢字はどんなに難しくても、日本語は漢字という表記があるので、学習者は漢字に触れぬば、知的な日本語が進まなく、成立しない。

参考文献

- 武部良明（1991）『漢字の教え方』　アルク
- 武部良明（1991）『文字表記と日本語教育』　凡人社
- 新井政義（1991）『小学漢字新辞典』　旺文社
- 漢字塾『「漢字」早わかりマニュアル』　ロングセラーズ
- 鈴木順子・石田敏子『表記法』　荒竹出版